

古賀登先生のご逝去を悼む

野中 敬



本学名誉教授古賀登先生は、二〇一四年（平成二六年）七月一七日早朝、肺炎のためご逝去された。享年八八であった。学問への情熱衰えるところを知らずお元気だった先生が、昨年体調を崩されたことはお聞きしていたが、このような訃報に接することになるうとは。まことに悲しみに耐えない。

一九二六年（大正一五年）五月生まれの先生は、横浜一中、旧制浦和高校から戦後早稲田大学に進学され、理科から一転して文科を志されると、新制大学院第一回生として東洋史学専修に進まれ、その後は助手、講師、助教授、そして教授と早稲田一筋で過ごされた。研究に教育に、文字通り戦後の早稲田の東洋史学を背負って来られたのである。

言うまでもなく、先生は唐代税制研究の第一人者であり、一九五〇年代以来のご研究は大著『両税法成立史の研究』（雄山閣、二〇一二年）にまとめられている。唐代の均田・租庸調制及び両税法の仕組みを解明された先生のご研究は、中国南北の地域性や生産の場の実態を踏まえ、さらに制度の裏にひそむ中国人の思考方式まで視野に入れた点で、制度史の枠組みをはるかに超えた画期的な業績だが、理系を志しておられた先生らしく、数学や農学など関係諸学を駆使して自説を論証された点でも他に類を見ない。まさしく戦後日本の唐代社会経済史研究の金字塔として、後世に語り継がれることは間違いない。もちろん、先生のご研究はこれだけに止まらない。六〇年代後半から中国の土地改革の系譜の研究に取り組みれると、戦国秦の商鞅による「開阡陌」を土地制度とする解釈を発展させ、限られた史料にクリティックを重ねる手法で、商鞅の諸

改革の全貌を体系的に解明された。先生はこのご研究で文学博士の学位を授与され、『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』（雄山閣、一九八〇年）を上梓されたのである。

一方で、先生は教え子を徹底的に鍛えて下さった。かつての大学院の古賀ゼミで、院生が研究発表後、先生から開口一番「いいんだけどね…」というお言葉を頂くと、これはもう駄目であって、その後は延々と問題点の指摘が続いた。発想を大事にせよ、しかし史料の裏付けのないものはダメ、発想が正しければ証拠となる史料が必ず見つかるかと厳しく指導して下さい。また先生は、自分の専門以外のテーマでも興味を持ち、闊達に議論するようにと常々おっしゃっていた。当時先生は、自ら発足の労を執られた唐代史研究会をはじめ、日本歴史学協会など学会の重責を担っておられたが、お手伝いでお邪魔させて頂いたシンポジウムや研究会で、先生は必ず発言され、自ら議論に加わられた。懇親会の席でも、お酒をこよなく愛された先生の周りには必ず人の輪があり、学問の話に花を咲かせていらっしゃったことが思い出される。

当時のゼミの様子をもう少し思い出してみると、私は駄目出しを頂戴してばかりだったが、稀に良い発表ができると、先生は身を乗り出してうなずきながら聞いて下さる。また、独特の言い回しで励まして下さった。ある時には「星を見つけない」とも。当時先生の真意は全くわからなかったが、後になって先生が旧制高校時代から鎌倉の円覚寺で禅の修養を積まれ、早稲田でも済蔭団の団長を務められたとお聞きし、また先生から勧められて鈴木大拙氏の『禅と日本文化』を読んで、やっと腑に落ちた。『禅と日本文化』によれば、禅の鍛錬法では真理は身を以て体験するもの、禅の論理は普通の推想法や評価基準と全く逆であると。先生は、研究が進まず呆然とする教え子に学問の何たるかを悟らせようと、工夫を凝らして諭して下さいたのである。師の教えの深さに頭が下がるばかりである。

一九九七年（平成九年）に停年で大学をお辞めになってからも、先生はますます意気軒昂で研究に邁進され、一時患われた膀胱癌も克服されると、以前から手がけて来られた四川省岷江流域の調査の成果を踏まえて長江文明の実態を解明された『四川と長江文明』（東方書店、二〇〇三年）、東洋史学の観点から日本神話を「釈古」された『神話と古代文明』（雄山閣、二〇〇四年）、『猿田彦と椿』（同・二〇〇六年）を次々と上梓された。ご自宅にお伺いすると「こんなことにまた気がついたかった」とご自分の研究のことを嬉しそうにお話しして下さいた。

ここ数年の先生は易の研究を進めておられ、その成果が遺稿となった『周易の研究―音占いから陰陽占いへ―』（雄山閣、

二〇一四年）である。原稿を出版社に渡された先生は、出版の目処が立ったことを確認された翌日、静かに旅立たれたとご家族からお聞きしている。そう言えば、以前先生から、学問とは自己の存在証明のためにするもののだとお伺いしたことがある。先生は常に実践者であつたのだと改めて思う。

古賀先生、ありがとうございました。

おわりに、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌。

（東京都立戸山高等学校主任教諭
本学教育・総合科学学術院非常勤講師）